

論文審査の要旨

| | | | |
|--|----------------|----|-------|
| 博士の専攻分野の名称 | 博 士 （ 心理学 ） | 氏名 | 眞鍋 一水 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1・2項該当 | | |
| <p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">生成要因とクライアントの影響からとらえた心理臨床家の臨床的価値観に関する研究 ——ケース体験に着目して——</p> | | | |
| <p>論文審査担当者</p> <p style="padding-left: 40px;">主 査 教授 岡本 祐子</p> <p style="padding-left: 40px;">審査委員 教授 杉村 和美</p> <p style="padding-left: 40px;">審査委員 教授 服巻 豊</p> | | | |
| <p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>心理臨床実践，とりわけ心理療法においては，その理論や技法に加えて臨床的価値観をはじめとする心理臨床家自身のあり方が重要である。臨床的価値観とは，心理臨床家が臨床実践を行う中で生じる，クライアントに対する情動や感覚，気づきである。本論文では，心理臨床家の専門資格である臨床心理士の資格取得後 15 年以上の中堅からベテランの心理臨床家を対象に，ケース体験に着目して心理臨床家の臨床的価値観の内容と生成要因，その変化を検討したものである。</p> <p>本論文は，以下のように構成されている。</p> <p>第1章「本研究の背景と目的」では，第1節「心理臨床家の専門性に関する研究」において，心理臨床家(以下，Th.)のあり方や臨床的価値観に関する研究の意義と必要性について述べた。第2節「心理臨床家の臨床的価値観に関する研究の動向」，第3節「専門性の熟達におけるクライアントとの関係とケース体験の影響に関する研究の動向」において，臨床的価値観についての実証的研究は乏しく，臨床的価値観の内容や生成要因，変化など，臨床的価値観の概要は明らかにされていないこと，その問題点と課題を指摘した。それらを踏まえ，第4節において，本研究の目的を述べた。つまり，研究1では，臨床的価値観の概要について，(1)臨床的価値観の内容，(2)臨床的価値観の生成要因，(3)臨床的価値観へのクライアント(以下，Cl.)の影響の3つの視点から検討すること，研究2では，臨床的価値観への Cl. の影響が生じる際にどのようなケース体験が関係するのかを，(1)Th. のケース体験の内容，(2)ケース体験と臨床的価値観への Cl. の影響との関係から，実証的に検討することを目的とした。</p> <p>第2章「臨床的価値観の内容，生成要因，クライアントの影響」(研究1)では，臨床的価値観の内容，生成要因，それに対する Cl. の影響を検討することを目的として，臨床心理士資格を取得後 15 年以上の Th. (年齢 41～68 歳)を対象に，半構造化面接を実施した。定性的コーディングによる分析の結果，1) 臨床的価値観の内容として，①Cl. 理解の深化，②Cl. への働きかけを重視すること，③心理臨床的援助において Th. の態度など Th. のあり方を重視することの3つが見出された。2) 臨床的価値観の生成要因として，①トレーニング要因，②Cl. との臨床経験要因，③Th. 個人の性質要因の3つが見出された。3) 臨床的価値観への Cl. の影響と</p> | | | |

して、①臨床的価値観の獲得、②臨床的価値観の調節、③臨床的価値観に基づく援助の意味理解の3つが示された。臨床的価値観とは、専門知を学んだ Th. の Cl. への援助に役立つとする愛他的な思いが、Th. の内的な資源から臨床的価値観として生じ、Cl. の反応を受けて援助に役立つよう変化することが示唆された。

第3章「クライアントの影響に関するケース体験の検討」（研究2）では、臨床的価値観への Cl. の影響が生じる際に関するケース体験について、研究1と同じ対象者から得られた面接内容を分析した。その結果、1) ケース体験の内容として、①わかる実感、②事例のわからなさ、③援助できなさ、④激しい陰性感情、⑤陽性感情、の5カテゴリが見出された。「わかる実感」と「事例のわからなさ」は正反対に位置するケース体験であり、Th. は Cl. のあるがままの姿に関心を持ち関わることが重要であることが示唆された。2) ケース体験と臨床的価値観への Cl. の影響との関係については、「援助できない」というケース体験から臨床的価値観が最も多く獲得されていた。「臨床的価値観の調節」はケース体験「激しい陰性感情」に集中してみられた。「臨床的価値観に基づく援助の意味理解」は、ケース体験「陽性感情」から多く得られていた。これらの関係について、対象者から提供された代表的な事例について、具体的な対応とその影響を分析した。「援助できなさ」を実感したケース体験が、Cl. 理解の深化や Th. のあり方を重視する臨床的価値観の獲得に影響していること、また「激しい陰性感情」を経験したケース体験が、臨床的価値観の内容は問わず、臨床的価値観の調節に影響にしていることが示された。

第4章「総合考察」では、第1節において「本研究の成果」、第2節において「本研究の限界と今後の課題」について述べた。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 研究の乏しい心理臨床家の臨床的価値観について、質的、実証的に検討し、その具体的な内容と生成要因を明らかにしたこと。特に、臨床的価値観の生成要因は、トレーニング要因、Cl. との臨床経験要因、Th. 個人の性質要因の3点であり、生成の時期は、心理臨床家によって異なることを示唆したこと。
2. 臨床的価値観への Cl. の影響は、臨床的価値観の獲得、臨床的価値観の調節、臨床的価値観に基づく援助の意味理解の3点であり、臨床的価値観とは愛他的で、学んだ知見を自分の言葉で言語化できることで生じ、Cl. の影響を受け変化する価値観であることを示したこと。
3. 心理臨床家の臨床的価値観の内容、生成要因、その変化を具体的に明らかにしたことによって、若手の心理臨床家の教育・訓練における具体的な着眼点を示したこと。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和2年2月6日